

かこさとし
加古里子さんと成蹊のミロのビーナス



成蹊学園/大学 サステナビリティ教育研究センター/宮下 敦

加古里子(かこさとし)さん(1926-2018)は、「だるまちゃん」シリーズや「からすのパンやさん」シリーズなどの作品で知られている絵本作家・児童文学者です。小さいころに加古さんの絵本を読んだことがある人も多いことでしょう。「かこ さとし」というのはペンネームで、本名は中島哲さんといい、福井県のお生まれです。小学生のときに東京に引っ越してきました。そのころから絵をみたり、かいたりすることか大好きだったそうです。第二次世界大戦前の学校は、現在と制度がちがうので「旧制」とつけてよびます。加古さんは、旧制第九中学校(現在の都立北園高校)を卒業したあと、旧制成蹊高等学校高等科(現在の成蹊大学の一部)に入学しました。

そのころ、日本は世界中をあいてに戦争をしていて、中学生や高校生は勤労動員といって工場などではたらいたので、授業らしい授業はあまりなかった時代でした。せっかく高校に入学したのに、ベンキョウはおろか、クラスで集まるチャンスもないので、加古さんは、クラスの人たちといっしょに俳句や詩を書いて「マント」という文集を作り、みんなでまわして読んでいました。「里子」というのは、このころに俳句をつくるための名前としてつけた俳号をペンネームにしたものです。加古さんが高校2年生のときに、病気になって入院していると、国語の中村草田男先生がおみまいにこられたそうです。先生は、そのときに加古さんの病室にあった文集の原稿を読み、俳句や詩の作り方をていねいにくわしく教えました。たぶん、加古さんたちが文集をつくっているのを先生はどこかで知って、俳句や詩について教えたくなくて、おみまいに行ったのだと思います。中村先生は日本を代表する文学者でしたが、国が戦争をしている苦しい時代にあっても、俳句や詩を愛し、それを生徒に教えにきてくれる、という先生を、加古さんは尊敬しました。

同じころに、芸術が好きだった加古さんは、高校の美術室にあったミロのビーナスの石膏像のすばらしさに、とても感動しました。すごく感動したので、こしに手をあてて、像とならんで写真をとってしまっただけです。戦争が終わって大学に入学すると演劇サークルにはいりましたが、そこでもミロのビーナス像の木版画をつくり、大学の学園祭のチャリティーで販売したこともあるそうです。

加古さんが好きだったミロのビーナス像は、現在、成蹊学園史料館で、たいせつに保管されています。ミロのビーナス像は古代ギリシャ時代に作られたもので、本物はフランスのルーブル美術館にあります。東京芸術大学が、本物をもとに作られた複製を買い、これをもとに宮島 一さんという人が作ったものが、成蹊のミロのビーナス像です。コピーのコピーということになりますが、明治時代に日本人が石膏像を作るさきがけとなった宮島さんの作品なので、本物とそっくりで、本物にまけない力があり、加古さんが感動したのもよくわかります。

大学を卒業したあと、加古さんは技術者になって会社で仕事をしました。仕事がお休みのときは、川崎市でこどもたちのためにボランティアで自作の紙しばいを作って上演したりしていました。でも、だんだん、こどもたちにいろいろと伝える仕事をしたくなり、とうとう会社をやめてしまって、作家になりました。こどもたちに伝えたかったことのひとつが芸



高校2年生の加古里子さんとミロのビーナス石膏像。
成蹊の校章がむねについています(加古総合研究所提供)。

術についてで、のちに「すばらしい彫刻^{ちようこく}」という彫刻の美しさを伝える本を作ります。この本の表紙にはミロのビーナス像の写真が使われていますし、ミロのビーナス像のことがくわしくとりあげられています。こどものときに出会ってからずっと、本がかけるくらい調べていたのです。ミロのビーナス像のすばらしさについて、もっとくわしく知りたい人は、ぜひ加古さんの本を読んでみましょう。

加古さんの作品をみていると、だるまちゃんも、こどもたちも、みんながニコニコ楽しそうです。からすのパンやさんも、おいしそうな食べものがたくさんできて、みんながニコニコしています。みんながニコニコしていることができたり、おいしいものを食べることができたり、芸術を楽しむことができたりするためには、戦争がない平和な世の中がずっとつづくことが大切だということを、加古さんはよく知っていました。加古さんが、小学生だったころ、日本は戦争をはじめましたし、高校生のときには、学校でベンキョウ^{くうしやう}はほとんどできず、空襲^{くうしやう}におびえながら、食べものがない生活をしなければならなかったのです。貧困^{ひんこん}や飢餓^{きが}や不平等^{ふびやうどう}は、戦争がおきる原因になりますし、戦争によってひきおこされるものでもあります。

SDGsの目標^{もくひやう}になっている「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」「質の高い教育をみんなに」「不平等をなくそう」は、どれも戦争をふせぎ、また戦争によってそれらをひきおこさせない、ということをめざしているのです。そのほかのSDGsの目標も、地球に住んでいる人たちが、一人もとりのこされずに平和にくらすためにたいせつなことです。

そのような世の中をつくるためには、きちんと自分の目で見て、自分の頭で考え、自分の力で判断^{ほんだん}し、行動^{かして}する賢さを、みんなが身につけなくてはなりません。だから「質の高い教育をみんなに」という目標が必要^{ひつよう}なのです。加古さんの作品の中には、自分の目で見て考え、自分の力で判断して行動できるようにするために、科学の見方や考え方をくわしく説明したものがたくさんあります。SDGsがはじまるずっと前から、加古さんは、そうしたことのたいせつさをとてもよく知っていて、みなさんに伝えたかったのではないかと思います。

<参考にした本>

別冊太陽編集部, 2017, かこさとし 子どもと遊び, 子どもに学ぶ, 別冊太陽, 日本のこころ^{へいほん} 248, 平凡社, 160 ページ。

かこさとし, 1989, すばらしい彫刻, 偕成社, 28 ページ。

加古総合研究所^{かんとしやう}(監修), 2019, かこさとしの世界, 平凡社, 167 ページ。

鈴木愛一郎, 2021, かこさとし 遊びと絵本で子どもの未来を(伝記^{でんき}を読もう 24), あかね書房^{しよぼう}, 144 ページ。

このコラムは、小学生のみなさんに読んでいただきたくて、よみにくい漢字にはふりがなをふってあります。もちろん、大人も読んでいただければと思います。

ビーナスは、「ヴィーナス」とかくこともありますが、「すばらしい彫刻」と同じかきかたの「ビーナス」をつかっています。

成蹊小学校の関口薫先生^{かおる}には、このコラムの原稿^{げんこう}への、アドバイスをいただきました。また、加古総合研究所の鈴木万里^{まり}



加古里子さんが大学生のときに描いた木版画(左, 加古総合研究所提供)と、成蹊学園史料館にあるミロのビーナス石膏像(右)。見くらべると、加古さんが、像の形をせいかくにつかんでいることがわかります。

さん(加古さんのご家族)には、貴重な写真を送っていただきました。成蹊学園史料館の保延有美さんには、ミロのビーナス石膏像のことを教えていただき、加古さんの写真のご手配などをおねがいしました。ここに記して感謝いたします。

筆者のプロフィール

みやした あつし
宮下 敦

成蹊学園サステナビリティ教育研究センター) / 成蹊大学教職課程センター / 理工学部 教授
専門は、理科教育学, 岩石学, 鉱床学, 科学史. 現在は, 地球科学を中心とした理科教育と, 日本列島の岩石や鉱床の成因について研究している.